

収蔵資料から

其の113 『大橋松平宛絵葉書』



【消印】大正13年6月18日
【宛先】長崎縣廳 社会課内 大橋松平様
【差出】甲州七面山上 奥の院にて 十八日早曉

歌を讀んでるより鳥の聲
奈と聴かむとて登山、海拔
六千五百尺、昨夜、佛法僧
を待つたが啼か奈かつた、あ
まりに雲が深かつたからだ、牧

佛法僧は啼かなかつたが
水恋鳥と筒鳥等聞いた
霧の中をこれから下山

(うら面) 御神木はアララギの木奈り、
利雄

大正13年6月16日、牧水は弟子の大悟法利雄と山梨県へ出かけます。身延山久遠寺に参詣し、赤沢村のゑびす屋に一泊します。翌朝、水恋鳥や筒鳥の声を聞きながら、霧の中を七面山に登り、奥の院の宿坊に泊まります。

この絵葉書は18日、宿坊を出立する早朝に書いたものです。大橋松平は雑誌「創作」の古参で、当時長崎県庁に勤めていました。

参照／『若山牧水伝』

牧水歌碑めぐり

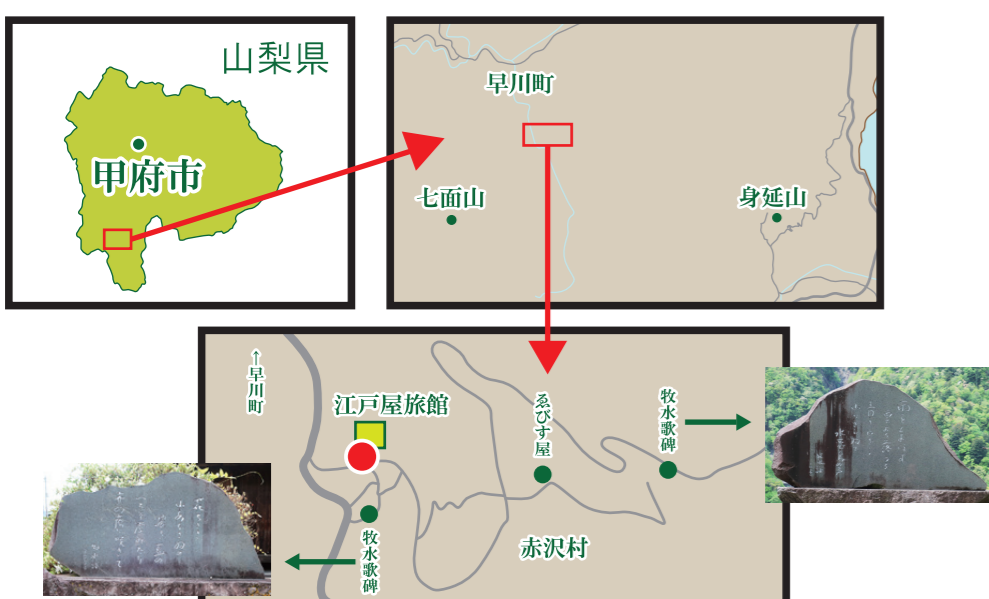
其の113 江戸屋旅館 (山梨県)



画像提供／石谷毅さん
平成19年建立

朴の木と先におもひし
近づきて
霧走るなかに見る
椽若葉
牧水詠
とみ子書

大正13年6月16日、牧水は弟子の大悟法利雄を伴い、山梨県身延山を目指し、赤沢村のゑびす屋に泊まります。現在は江戸屋だけが営業しており、「身延七面山紀行」で二町ほど集落の間を下るなかに、我等の泊つたのより遙かに大きく古めかしい宿屋の一二軒が眼についたと記しているのは、江戸屋のことと思われる。赤沢村には他に2基の歌碑があり、いずれも牧水の次男富士人の妻とみ子が短歌を書いています。



参照／『牧水全国歌碑めぐり』

文学館だより



令和8年 6月 1日
若山牧水記念文学館
TEL 0982-68-9511
文貴日高第122号

令和8年度おもな事業のお知らせ

4月～3月	牧水メモリアルイヤー(生誕140年～没後100年) 企画展「牧水43年の生涯」
4月～7月	第16回 青の國若山牧水短歌大会作品募集 一般の部題詠「歌」
12月12日(土)	第16回 青の國若山牧水短歌大会表彰式 (会場 日向市中央公民館)
8月8日(土)	第16回 牧水・短歌甲子園一次リーグ (会場 日向市中央公民館)
8月9日(日)	第16回 牧水・短歌甲子園準決勝・決勝 (会場 日向市中央公民館)
8月23日(日)	小田加奈子コンサート ～「若山牧水」の歌を郷土の歌手「小田加奈子」が歌う～
9月17日(木)	第76回牧水祭 (会場 牧水生家周辺および牧水公園ふるさとの家)
6月～11月	伊藤一彦短歌実作講座(中級者コース)年3回開催
7月～2月	短歌実作基礎講座(初級者コース)年5回開催
1月～2月	企画展 第31回若山牧水賞
6月～9月	第14回 高森文夫を偲ぶ詩大会作品募集 日向市内小学4年生～6年生対象
1月17日(日)	第14回 高森文夫を偲ぶ詩大会表彰式

多くのご来館、ご来場をお待ちしております。

若山牧水全集(増進会出版社)月報より 再開 第4話

第1巻月報(1992・10) 4 連載・牧水片々(一) 若山旅人

今となつては殆んどの人に覚えが無いと思われる一つの汽車の様子から、書かせて頂くことにする。今はこの汽車という言葉すら、例えば短歌の世界でも、もう見る事が無くなってしまったからである。その客車の大きさは真に小さくて云わば「はこ」と言った方がいい程で縦三メートル横五メートル位だろうか、トロッコのように車輪も直正に四個ついているだけである。そして中の座席の様子といえば、走ってゆく方向に向って横一列に、車輪の中一杯にぎしり木製のベンチが固定されていて、まるで小型の教室が幾つも繋がったまま目的地に向って乗客と子ども移動していくような具合だった、そして不思議なことに車輪にはすべて中央通路が無いので、客の乗降はどうするかと思うと、各ベンチの両はしが小窓付きの小さなドアになっていて、駅に着くと騒々しく一せいにホームに向って開くのだった。その賑やかさは女性がスカートを広げるような花やかさで、汽車全体から一時に零れるように客が降りるのである。そしてパタパタと首を立てて駅夫が窓を閉め歩き、やがて発車する。いくら明治とはいえ赤松鱗作の名画「夜汽車」を見ると既に中央通路もあり客席も両側の窓際に並んでいて、私の記憶のこんな童話めいた客車ではない。そしてこの英国風な古典的の車輪はその日何処を走っていたのだろうか。

実はこの一連の風景が、私の生涯で実に最初の記憶なのである。私にとってこれ程ロマンチックで貴重な映像は無い。続いて現われるのは私の手に握られている子供用の玩具の「刀」である。私は浮かれて汽車の窓から身を乗り出している。背後から私を支えているのは父である。私は牧水の手を感じている。やがて私の振り廻す刀から鞘がぬけてゆく。竹べらに銀紙を貼った三十程の軽いおもちゃである。逆手に持って振り廻せば必らずそれはぬけて行く。その通りにその鞘は私の刀からぬけて風に乗り私から去ってしまった。それはクルクルと二、三度回転して線路際の砂利の上に落ち、列車の起す風に煽られて、一、二度身じろぎをしたまま私の視界から消えた。私はそこ迄を呆気にとられて見ていた。次の瞬間に私は、取り返しのつかない後悔で泣き出した。それからが大変だったのである。

この日は大悟法利雄氏の調査によると大正4年3月19日だった。牧水は病妻喜志子をかかえて東京の生活を積み、湘南北下浦長沢の海岸に転居した日だった。品川を出ると横浜で支線に入り横須賀迄行くローカル線となっていた訳である。刀は品川駅で見送り客から頂戴したおもちゃだった。私は自分の失態の残念さで泣きわめいた。牧水が「旅人の泣声は一町四方に拡がる」と書いている位である。私を窓の内側で掴んでいた牧水の隣りに母が居り、その奥の隣りに誰か居たかは覚えていないが、とに角横須賀に着く迄は同車の人々から迷惑がられた若い親子連れ三人だったに違いない。私には牧水の眼の情けなさそうな表情が母の目色よりも記憶に残っていて、この哀れで貧乏な一家の姿は、悲しい思い出として生涯忘れられないだろう。私の誕生は大正2年4月24日だから、この時満1歳11ヶ月だった訳である。それにしてもよく覚えていて自分自身に感謝するのである。今度の月報には、私が父親として身近に見た牧水の姿を鮮やかに書き残しておきたいと思う。(歌人)

次回は第2巻月報(1992・11) 5 白鳥の一首 俵 万智 を予定します。
なお、表題前の数字は文学館だより掲載上連番といたしますので、ご了承ください。

『伊那節』は牧水の十八番だった

牧水は短歌朗誦や名文朗読など子どもの頃から美声であったことはいまでもありません。中でも、『伊那節』『木曾節』が十八番だったことが文献のあちらこちらに残っています。この2ヶ月の間に絶妙なタイミングで、知り合いが民謡のCDを貸してくれたり、4月に出かけた「朗読と篠笛で綴る 若山牧水の世界」では伊那節演奏を生で聴いたりしたので、改めて牧水を読んでみました。

『牧水伝 大正十年』より

(略)二十一日朝一人となって雨の中を船津町に向かった。途中神原峠というのにかかる雨がいよいよ烈しく、洋傘などほとんど役に立たないので、牧水は古川町で買って来た一位笠を冠ったまま、心細い一位の笠に、ノかかる時雨の船津越えノと即興の伊那節を歌いながら、涙をこぼして歩いた。(略)

『みなかみ紀行 白骨温泉』より

(略)たゞもう終日湯槽から湯槽を裸体のまゝ、廻り歩いて、できるだけ声を出して唄を唄うのである。唄と云っても唯だ二種類に限られている。曰く木曾節、曰く伊那節、共に信州自慢の俗謡であるのだ。また其処に来る信州人という中にも伊那谷、木曾谷の者が過半を占めているようで、従ってこの二つの唄が繁昌するのである(略)

一位の笠とはアララギで作ったかぶり笠のことで、牧水納棺の折には旅の必需品の中のひとつとして納められています。牧水の歌声の復元を切に願います。

ほっこりのおすそわけ = 生家ノートより =

5/4 静岡より参りました。牧水さんは生活感あふれる資料が残っているので、いつか朝ドラになってほしいと願っています。今の時代にも通じる青年らしい苦楽など、仕事も恋愛も一生懸命です。また来ます。奇遇にも牧水さんが行かれた土地に私共も重ねて旅をしています。いつもそこには歌碑があり、誇らしいです。

宮崎県内出身のご夫婦が静岡の地に転居されたこととお話しくれました。朝ドラ♡

5/13 宮崎市より 2024.10 転勤で山梨より宮崎へ 待望の牧水生家に来ることがようやくできました。また時間をつくって訪れたいと思います。

待望の～が嬉しすぎます。「あの時の○○です」とお声かけください。来訪ありがとうございます。

5/16 串間より来ました。TVなどで放映されるたびに訪れたいものだと思っておりました。先生の父上は都井の方で医師として働かれていたと思います。私の嫁は、その都井の出身です。高校時代「ふるさとの～」で始まる歌に先生の故郷への思いを強く感じました。また訪れたいと思います。

県内とはいえず片道2時間以上かけてお越しくださいました。また訪れたいと思っています。

牧水先生の一首 折に触れて出会う一首を紹介しています

われ歌をうたへりけふも故わかなしみどもにうち追はれつつ
われうたを うたえりきょうも ゆえわかぬ かなしみどもに うちおわれつつ

第一歌集の巻頭歌。初句の始まりに「われ」を置き、歌をうたわずにいられない自分であることをアピールしている。「故わかぬかなしみ」は理由のわからない「かなしみ」で、青春の「かなしみ」はそれゆえに辛く、深く、貴い。「かなしみども」の「ども」は複数というより、「かなしみ」の擬人化だろう。その得体の知れない「かなしみども」が今日もまた自分を激しく追い、迫ってくる。逃げながら牧水は声のかぎりに歌をうたう。第二句の「うたへり/けふも」の句割れに切迫感が十分に出ている。歌人牧水の姿を鮮やかに印象づける一首だ。(引用 伊藤一彦『若山牧水の百首』)

今年度も伊藤一彦短歌実作講座、短歌実作基礎講座を開講します。そう特別でなくても、日常ふと心に留まったできごとを日記代わりに詠んでみるのもいいのではないのでしょうか。詠んでみたいものです。

参照『若山牧水全歌集 伊藤一彦編』

企画展『文学ノート拝見』

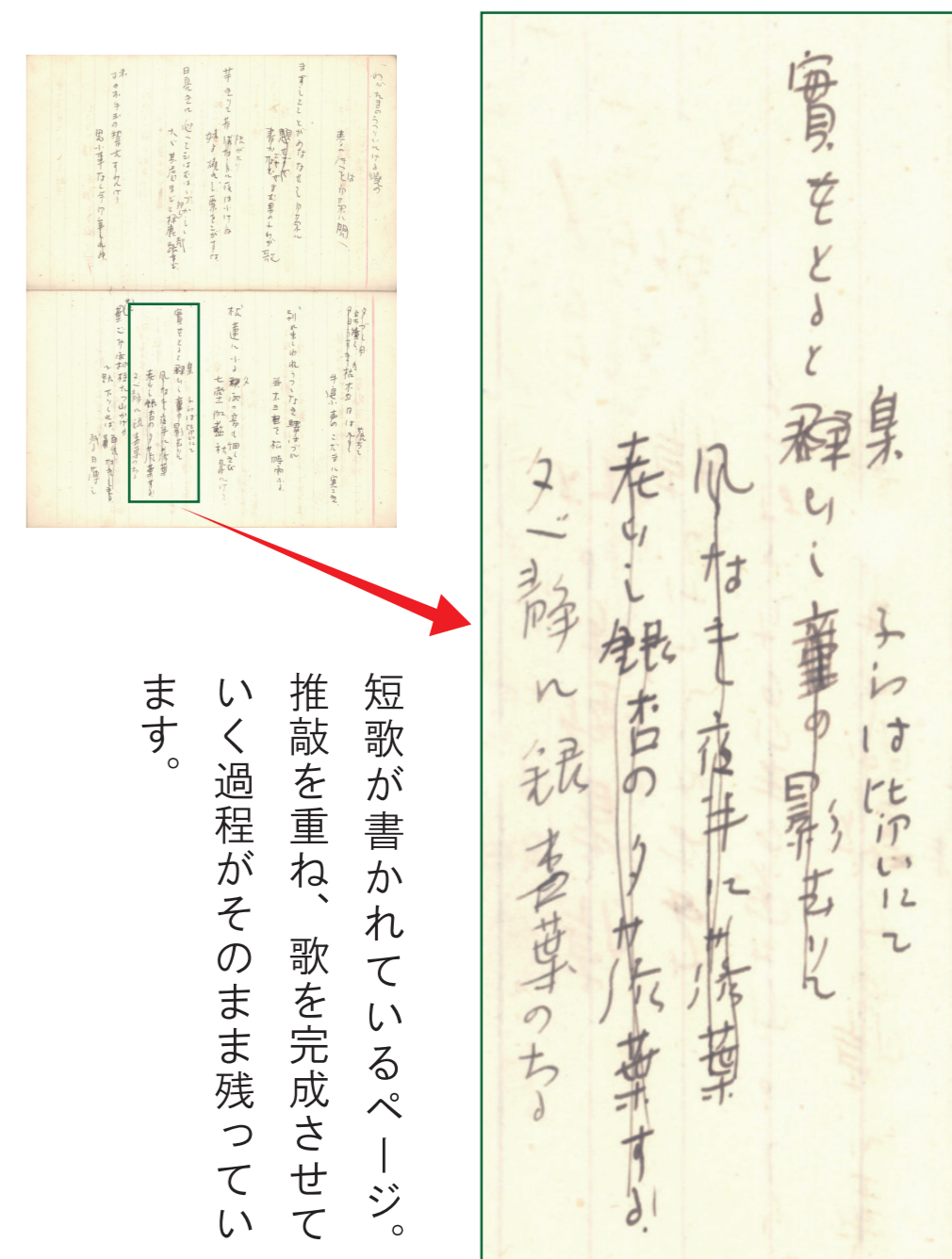
歌人牧水の出発点を探る

【会期】6月3日(水)～8月2日(日)
【会場】企画展示室

牧水は延岡中学時代に短歌を作り始め、多くはありませんが随筆も書いています。この時代に作った作品を書き留めた「文学ノート」が文学館に残っています。

ノートには推敲を重ねた跡がそのまま残されており、作品を完成させる過程を追跡することができます。また、全集等に収録されていない作品も書かれています。

今回、普段見ることのないノート全ページをパネルにして公開しています。歌人若山牧水の原点に触れる絶好の機会です。



短歌が書かれているページ。推敲を重ね、歌を完成させていく過程がそのまま残っています。

若山牧水記念文学館

〒888-0211 宮崎県日向市東郷町坪谷1271番地

■利用案内■
【開館時間】9:00～17:00(入館は16:30まで)
【休館日】月曜日(祝日は除く) 年末年始(12月29日～1月3日)
【入館料】小・中学生/100円 高校生以上/310円(20名以上の団体は2割引)
【お問合せ】TEL 0982-68-9511 FAX 0982-68-9512【公式HP】https://www.bokusui.jp

